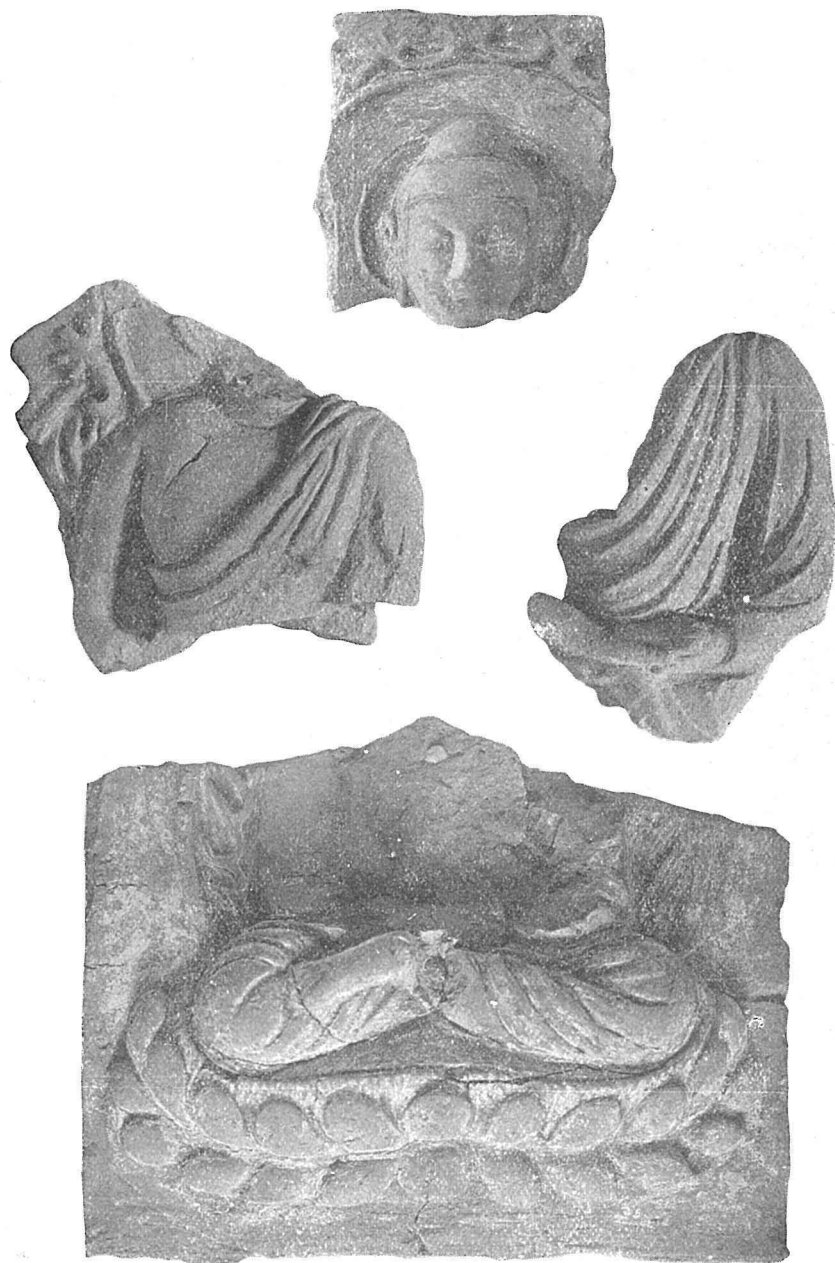


(照參事記欄報彙)

壇基阼塔寺麗高城山



(照參事記欄報彙)

佛埵土出阯寺福崇江近

の塊を支那に見出した爲でないかと思はれる。

この種數多くの研究中、バック編纂の支那農業に關する標記の書は、廣汎な分野を、各方面から、バックを始め多數研究者が、分擔分析した結果の集大成であつて、量・深さ何れの點からも、代表的なものとなつてよい。編を分つこと五、曰く支那の農業並に農業地帯、外的諸要因、人間による土地の利用即ち農業經營、農産物の販賣とその價格、人口、生活水準、章を分つこと十五である。

その根幹をなしてゐるのは、バックが、前著「支那農家經濟研究」で試験済の方法により、莫大な費用と多數の人とを動員して作製・整理した、支那の農業經營・農家經濟に關する統計である。觀察範圍が前著では、七省、一七地方、二、八六六農家に限定されてゐたに對し、本書では、二大地帯、八農區、二二省、一六八地方、一六、七八六農業經營、三八、二五六農家を含み、分野こそ異なるとは云へ、リヒトホーフエン以後の支那に關する大著である。

從來支那農業に就いては、表面的な概括論か單に示唆的な記述しか存在しなかつたから、本書により啓發される點は、枚擧に餘がない。地理學的に注意すべきは、秦嶺・淮水の線を以て支那を小麥・水稻の二大地帯に分ち、小麥地帯を春麥區、冬麥・粟區、冬麥・高粱區、水稻地帯を揚子江水稻・麥區、水稻・茶區、四川水稻區、水稻二期作區、西南水稻區、計八區に區劃し、それの特徵を努めて數量的に叙述したことである。これまで一口に支

那の農業を論じ、或は漠然と南北を分つたのとは、格段の前進である。

以上述ぶるが如くであるから、支那農業の研究はバックにより眞に一紀元を劃され、バックを卒業せずして支那農業を論ずることとは、不可能となつた。勿論、調査數は未だ九牛の一毛に過ぎず地區別の如きも今後の檢訂により補訂を要し、この任務は環境・農業の基本性格を等しくする我國學徒に課せられてゐるのであるが、その第一着手として先づバックの消化を必要とする。(菊田)

## 彙報

### 史學研究會

例會 十月十五日(土)午後一時三十分より陳列館第一教室に於いて開催、新歸朝の左記三氏を迎へてその旅行談を聞いた。來會者約五十名、頗る盛會裡に薄暮散會した。

トラツク島に滞在して

西亞細亞紀行

歐洲 瞥見

右の中泉井、小牧兩氏の談話は追つて本誌に掲載の筈につき、

宮崎氏の談話のみ左にその概要を記す。

西亞細亞紀行

宮崎 市定氏

昨秋、ルーミアニアのブカレストで開かれる人類學先史考古學大會に日本代表として出席せよと命令をうけて列席した私は、一度なりすまされたにわか考古學者の味が忘れられず、イスタンブールから小亞細亞を横斷してシリヤよりイラクに入りモスール、バグダッドを経て再びシリヤのダマスクスに出でパレスチナ、エジプトと近東氣分を満喫しながら、新米考古學的踏査旅行を試みた。

獲物は各地にころがつてゐる。イスタンブールでは獅子が鹿を捕へてゐるビザンチン大理石像が路傍に轉つてゐたが、これなどは大きすぎてひろつて歸れない。アレツポからトルコの鐵道でモスールに出ると、こゝでは小山になつた土捨場から青色陶器のかけらを見つけて拾つた。しかしつまらぬものばかりであつた。バグダッドは千一夜物語などではロマンテイクな街と思はれるが、行つてみると汚い處である。バビロンなどもつまらぬ。しかしここにはバビロン盛なりし頃の陶器が出る。ドイツの探検隊が有名なイシタルゲートをそつくり持つて歸つて、ベルリンの民族博物館においてある。私はそこで釉のかかつたものを拾つた。紀元前七世紀頃のものである。

一番收穫のあつたのはカイロである。南方に舊カイロといつて廢墟があり、政府が發掘してゐる。イスラム時代のものばかりでなく古エジプト時代のものも出る。舊カイロの續きで東の方に小山の延びてゐる處がある。私はその土捨場にいろんなものが出ることを發見したので、何度も拾ひに行き或時などは横山公使から午餐に招かれてゐたのをうつちやつて獲物をあさつた。だいぶ

遅刻していつて公使にその譯を話すと、公使も乘氣になつて俺もつれていつてくれないかといつたが、帝國を代表する全權公使にまさかバタヤの眞似はさせられないと思つて連れてゆかなかつた。舊カイロで出た茶碗かけはアラビア博物館で賣つてゐるのでこれも買つた。あまり重くなつて困つてゐると横山公使がポートサイド迄届けてやらうと云はれ、大きな荷物私の歸朝より前に研究室についてみた。

一體陶器の歴史の中で支那の陶器は獨特の位置を占める。この製作術が西の方に入つてイスラム世界へも影響してゐるが、如何いふ風に影響してゐるかを調べたかつたのである。古く唐三彩などが波斯陶器に模倣され、蒙古の侵入と共に支那職工も來て働きて更に明の頃からこの方面へ海路多量の陶器が輸入されて上下にもてはやされた。カイロで手に入れたものの中に、「大明成化年製」の銘の入つたものがある。成化年製といふのは日本でも作るが、これは明のものらしい。成化といへば十五世紀の終で、ポルトガル人などが東洋へやつて來ない時である。十五世紀の初の鄭和の遠征、これは何度かインド、ペルシア、更にアフリカの沿岸にまで行つてゐるが、南方交通が盛になつて來たのはこの影響であらう。成化はこの遠征の後程遠からぬ時代である。

支那の製法を眞似たイスラム世界の陶器は、高い火力を出すことが出來ないと見えてやき方が足りないで軟い。地肌がぼそ／＼してゐる。地肌を調べるには私のもつて歸つたかけらはもつてこいである。作者の銘を入れ、吳須を使ひ朱を使ふのも支那の眞似

である。特に朱は明の赤繪の影響である。次第に立派な陶器を作る様になり、モスクの内面にはりつめてある青色タイルなど實に美しい。

現今、イスラム世界が學問上からやかましくいはれ、又、政治的にも經濟的にもこの方面と手を結ばなければならぬといふことを政治家實業家などが考へてゐる。實際行つてみると、こゝらあたり獨立國が出来てもよささうな氣がする。しかし昔のサラセン大帝國の様な立派な國が出来るか如何か。アラビヤ人は、殊に私の見たのは外國人を相手にする接客業者であつた性もあらうが、餘りに歐洲文化に惡ずれがしてゐる様に思はれる。これでは駄目だ。私はエルサレムで一人の素朴な愉快な男に遭つた。これはベズーインの服裝のまゝの自動車運轉手で單純で素朴で丁度サラセン當時のアラビヤ古武士を思はせるものがあつた、もしかういふ連中が文化の恩恵に浴して奮起する日が來たらば、この方面に面白い形勢が出現することであらう。(外山記)

尙、右講演に關係して氏の將來せる左記の如き資料を陳列して來會者の觀覽に供した。

- 一、バビロン遺跡發見陶片及楔形文字破片
- 一、コーラン經寫本二種
- 一、シリアアレツポ博物館藏土偶(模型)
- 一、モスク、タイル破片
- 一、埃及カイロ發見硝子
- 一、埃及カイロ發掘品、支那陶器破片、壺、ランプ、支那陶器

の影響と思はれる陶器マーク數種

その他各地寫眞、繪ハガキ及博物館案内書

大會 恒例の本會大會は前號預告の如く十一月十九(土)、二十

(日)兩日に互つて舉行せられた。今その概要を記せば

第一日は午後一時三十分より樂友會館講堂に於いて公開講演會を催し、左の如き講演を行つた。參會者約百五十名。

遷代の建築

村田 治郎氏

滿洲、北支に現存する遷代建築として、

一、佛寺には

河北省 薊 縣 獨樂寺 觀音閣……………統和二年

同 山 門

河北省 寶坻縣 廣濟寺 三大士殿……………太平五年

晋北 大同縣 華嚴寺 薄伽教藏……………重熙七年

同 同 海會殿

同 同 大雄寶殿?

同 同 善化寺 大雄寶殿

錦州省 義 縣 奉國寺 普賢閣

河北省 易 縣 開元寺 大雄寶殿

毗盧殿?……………乾統五年?

觀音殿?

樂師殿?

二、佛塔には

A 木 塔

晋 北 應 縣 佛宮寺 木塔……………清寧二年

B 内部へ道入れて上へ昇ることができる埴塔

興安西省 白塔子ノ塔

内蒙古綏遠東方 萬部華嚴經塔

河北省 涿 縣 雲居寺 塔……………大安八年？

智度寺 塔

C 第一層だけが高くて第二層以上は斗拱を用わず積重ねた埴塔 ○印は寺院の中心線上になく前方にならび立つたもの

熱河省 寧城縣 大名城 塔

錦州省 義 縣 嘉福寺 塔

錦 縣 廣濟寺 塔

奉天省 奉天塔灣舍利塔

海城縣 析木城金塔

河北省 通 縣 塔

易 縣 泰寧寺 塔

北 京 天寧寺 塔

○錦州省 北鎮縣 崇興寺 双塔

○朝陽縣 北塔、南塔

D 第二層以上にも斗拱を用いた埴塔

興安西省巴林左翼旗 遼上京南塔

河北省 涿 縣 普壽寺 塔……………大康六年

房山縣 雲居寺 南塔……………天慶七年

E 變型埴塔

河北省 房山縣 雲居寺 北塔

等が主なるものであるといひ、幻燈によつて、これら建築の全形細部を示して斜斗拱がさかん使はれ、墓股類似のものが多く見られる點を擧げて聽衆をして遼代建築の特徴を感得せしめられた。

日唐通交に於ける圖書問題に就いて

板澤 武雄氏

戦争と人間

原 隨園氏

人類の歴史には恰も自然界に於ける如く、嵐があり、雷雨の襲來が見られる。自然界に於ける地震や津浪の如く、人間生活に於ても度々 *Volkerstürme* が繰返くされる。人々は血生臭い不幸の前に戦慄し、本能的にかゝる嵐を嫌悪する。

人間生活の中に吹き荒ぶこの様な嵐を、戦ひを歴史家は如何なる眼を以て眺めるであらうか。

生命を賭してたゞき合ふ戦ひの歴史的分析に入るには先づ、歴史に於て人間を如何に考へるか、から問題に入らなければならぬ。

歴史に於ける人間性は生命力を保育する事である。生きんとする力を保育する事が文化の發展である。生命力は知性的な保育を受けて強化される。それと共に、生命力の暴力化に依つて知性的なものが破壊され、それに依つて知性が一層進展し、それが又生命力を保育する方向へと向ふ。かゝる創造の繰返しが人間文化の發展である。即ち、直接、生命力を脅かすたゞかひに於て、肉體的

な弱點を補ひ、強化する事に依つて自己の戦闘力を有力ならしめんとする。

肉體的な補強には第一には體力の補強で、それは集團に依る。第二には知性を用ふる事である。

個としての我々の生命が社會的關聯、連帶性を深く持つ事に依つて二人の間のたゞき、合ひとしての戦が、それに連がる種族の戦に迄擴大される。戦はその基礎に於て種族的な血のつながりを強く持つてゐる。

イリアスに見られるパリス Paris とメネラオス Menelaos との決闘、ヘロドトスに於けるスパルタ Sparta とアルゴス Argos の争ひには以上の性格が明らかに認知し得られるのである。

更に、知力の加はる事に依つて肉體の弱點が補強される。こゝに戦に於ける武器の問題が見逃し得ない重要性を持つて来る。

ギリシヤ、ローマに於ける傭兵の地位、中世に於ける武士階級の擡頭、近世國民國家に於ける國民軍の編成、すべて之等の問題は武器の階級性に凝集される。

人間知性の精華と云はれる武器の進歩は反つて生命力の危険をもたらす。これは知性の生命力保育と云ふ本來の使命の破綻である。こゝに再び知性は如何にして生命力を保育するかと云ふ本來の使命に立向ふのである。云々(文責在記者)

因みに本講演は人間學講座第五卷に掲載される筈である。

第二日 は午前十時洛西睡職大覺寺に集合、參會者は京大俱樂部會員をも加へて約百五十名、まづ心經殿に於いて本學教授西田直

二郎博士の「大覺寺に就いて」の講話を聞きたる後、役僧の案内にて本堂以下國寶の客殿、宸殿等を巡覽し、本會の爲に特に陳列された寶物類を見學した。その一々に就いては京都府囑託赤松俊秀氏が解説の勞を執られた。正午別室に於いて會員一同晝食を共にして懇談、午後一時より本學講師源豐宗氏の「釋迦堂の本尊に就いて」の講話を聞いて、後一同清涼寺に向つた。同寺にては特に有名なる秘佛三國傳來燉迦本尊を開帳せられ、更に國寶清涼寺緣起をも展いて觀覽に供せられた。午後二時半散會の後會員等は思ひ／＼に近傍の秋色を賞して一日の歡を盡した。終に本大會の爲に多大の便宜を與へられた大覺寺、清涼寺に對して衷心謝意を表する。

#### 大覺寺特別展觀目錄

##### 一、後宇多天皇宸翰

- (一) 傳流目錄抄 一巻
- (二) 灌頂印明 隆 一巻
- (三) 灌頂印明 勝 一巻
- (四) 金界水明加歸命句事 一巻
- (五) 灌頂印明 源 一巻
- (六) 許可 行宴傳 一巻
- (七) 兩界許可作法 小島 一巻
- (八) 高雄曼荼羅御修覆記 一巻
- (九) 寶珠抄 一册
- (一〇) 奥砂子平口決 一巻

- (一) 傳法灌頂作法 一卷
  - (二) 金剛界傳法灌頂作法 一卷
  - (三) 灌頂私注 一卷
  - (四) 悉曇印信文 一卷
  - (五) 弘法大師傳 一卷
  - (六) 護摩口決 一卷
  - (七) 祕鈔 十七卷
  - (八) 袈裟印 一卷
  - (九) 傳法灌頂初後夜供養次第 二册
  - (一〇) 御手印御遺告 一卷
- 二、歷代天皇宸翰
- (一) 國寶後深草天皇宸翰御消息 一幅
  - (二) 伏見天皇宸翰廣澤切 一幅
  - (三) 伏見天皇宸翰御歌切 一幅
  - (四) 國寶花園天皇宸翰御消息 一幅
  - (五) 後花園天皇宸翰御詠草 一幅
  - (六) 後土御門天皇宸筆御懷紙 一幅
  - (七) 後柏原天皇宸翰御詠草 一幅
  - (八) 正親町天皇宸翰御詠草 一幅
  - (九) 後水尾天皇宸筆御懷紙 一幅
  - (一〇) 後西天皇宸翰色紙 二幅
- 三、文書典籍
- (三) 禪助書狀 一卷

(三二) 性圓親王記文 一卷

(三三) 寬尊法親王記文

(三四) 孔雀經音義 三册

(三五) 今城切 一幅

(三六) 源氏物語

四、後宇多天皇宸影

(三七) 法服宸影 一幅

(三八) 烏帽子直衣宸影 一幅

(三九) 素絹宸影 一幅

(四〇) 冠御引直衣宸影 一幅

五、繪畫

(四一) 理趣經曼荼羅 一幅

(四二) 弘法大師像 一幅

以上

國史科學生北九州・壹岐・對馬見學旅行記

第一日 十月十五日(土) 京都——博多

午後九時二四分、恒例の秋季見學旅行に志して小雨の中を出發した。藤・柴田兩先生、平山副手、二回生四名(總積・酒井・横田・水野)のさ、やかな人數、西田先生は御風邪の爲、後より御參加になるとの由である。

第二日 十月十六日(日) 博多

眠り難い夜汽車の一夜を明かして早朝門司に渡る、此處で、清



原先輩、近田の兩君が加はられた。門司八時五〇分發、十一時〇五分には最初の目的地たる宮崎に着き、九州帝大の竹林・田中・筑紫・檜垣諸氏福岡高校の井上氏等の出迎を受けて、直ちに宮崎宮に参拜、此處にて見學したる主要品は左の通りである。一、棟札類、天正十五年より明治卅三年迄數個、一、敵國降伏の宸翰(續)、一、寄進狀類、大友宗麟を始め、秀吉、小早川秀秋、黒田長政、同忠之、同齊昭等にして、別に黒田家歴代の御判物がある。寶物館を出て拜殿に詣り、一同修祓を受け、一週間の間道中安全を祈願する、本拜殿は國寶にして、最近、九月上旬修理を終了したもので、塗り替へられた朱の色も未だ眞新しい。筑紫氏より殿内諸部の説明を聞き終つて徒歩にて九州帝大に行く。中食を此處にて攝り、國史研究室附屬圖書館、九州文化史研究所等を巡覽し二時過ぎ工學部本館露臺に登つて、四方を展望し、説明を聞く。當處にての主要見學品左の通りである。

九州文化研究所 一、宗家文書、社會經濟史料に關する物多く鑛山、鑛業、對馬島、對朝鮮關係の史料が主なるものである。その一々の題目は茲には省略する。

附屬圖書館 郷土史に關するもの多く、貝原益軒、龜井南冥等の自筆本、書翰類が多い、龜井南冥のものに金印辨があり、例の倭奴國王の金印に就きて論じたものであり、外に御笠軍團、遠賀軍團の印の寫しがある。又、東鑑の元和活字本、伏見版、慶長活字本等もある。斯くして三時過ぎ、九大の諸種の御便宜を謝して、薬王蜜寺東光院に至り、多數の國寶佛像を拜觀、急に東長寺に

立寄り千手觀音像(國寶)を見學、釣瓶落しの秋の夕暮をかこちつ、電車にて天神町平岡氏邸に神谷宗湛の茶室(現在瀧浩庵と稱す、國寶)を訪れる。此處に憩ふ間も無く、百道の元寇防壘を見學、暗闇の中を檜垣氏の説明を聞きつゝ、懐中電燈で照らして見る。再び天神町に至り、此處より急行電車にて二日市へと急ぐ、最早之にて本日の見學の豫定は終り、第一日を終つた。二日市に着き直ちに延壽館に至り、温泉に一日の疲れを醫して、夕食を九大の方々と共にする、春日・竹岡・田中・井上・日野・檜垣諸氏其他多數御參會あり、歡迎者側の方が多い位である。十時過ぎ、九大の方々の御歸りを見送り旁々御西下の西田先生を驛に御迎へして、宿に今日中の出來事を色々語り合ひ、更に本日迄三日間休航との明日の壹岐行きの船の事等氣にしつゝ、思ひを壹岐に馳せ十二時前後床に就いた。

第三日 十月十七日(月) 太宰府——壹岐

此の日は朝から北筑紫の山の上には雲は少々あるが概ね良好の天氣といふ事に一同勇躍し、九大鏡山氏の東道にて先づ第一に午前中の豫定たる太宰府神社に自動車にて詣でる。陳列館・寶物館等を見學す、重なる見學品は左の通りである。一、太閤朱印狀 一、七卿遺品 一、北野縁起 一、古文書一卷 一、渡唐天神之岡狩野元信筆、同由來記二軸(國寶)等である。同所を辭し、更に自動車にて觀世音寺に至る。當寺には國寶佛像多數あり、馬頭、聖、不空羅索、十一面等の各觀世音像が本堂にあり、別館には多聞天を首め四天王像其他あり、一、梵鐘平安初期の作で、菅公の

觀世音寺唯聞鐘聲の句にあるもの、同寺を辭して、都府樓趾に赴く、昔鎮西の總政廳として、豪華壯大なりしも今は唯點々として巨大なる礎石に昔を偲ぶのみである。こゝで西田先生の御撮影に依つて一同寫眞を撮り、梅ヶ枝餅を食しつゝ、自動車を疾驅させて國分寺を経て水城趾に行く、附近を見學し急行電車にて再び博多に向ふ、岩田屋食堂にて食事を攝り博多灣棧橋の九州汽船乗場に急ぐ、三日間の缺航に大混雜を呈してゐる陸丸へ乗込む、時に午後一時半、遙かに霞む筑紫の山々に別れを告げつゝ、出帆して海路無事にあれかしと念じつゝ、壹岐へと向ふ。(近田吉夫記)

午後六時頃夕闇漸く迫らうとする時我々の陸丸は武生水港に入港した。鴛田先輩山口氏目良氏等の御出迎を受けて上陸直に目良氏の御案内にて町の舊家今西本家の竈を見學、三百年來の舊家で併も飾付は島の古俗に通じられた目良氏作と云ふ丈に立派なもの、ユズサゲ(師走十三日煤拂ひ)に使ふエビガネだの正月六日の行事に用ふるコツペラ或は結婚の結納に使ふタル繩とか撞木等の我々都會人の見馴れぬ民俗用具を見て、平田屋旅館に入る。夜は島の民俗通、「壹岐島民俗誌」「同方言集」「同昔話集」等の著者山口麻太郎氏及目良龜久兩氏を圍み、見學地及島人の風俗習慣生活等に就いて座談會を開き、興味津津々として夜の更くるを知らなかつた。特に我々の興味を惹いたのは島獨特の社會共同體組織即ち講中組織やテアイ仕事モヤイ仕事の如き相互扶助方法或は漁の分配法に共同體的のものと資本主義的のものとある事、昔時行はれた土地割替制度等であつた。

第四日 十月十八日(火) 壹岐

明れば天氣晴朗、鴛田・山口・目良三氏の御案内にて自動車で島内見學に出發。先づ印通寺村松永英太郎氏の所藏せられる松本友雄氏等發掘附近原ヶ辻、深江ヶ原等より出土の考古學的遺品を見る。繩紋式、彌生式、祝部式土器を初め青銅鏡一面、骨製、槍、劍、針、磨製の石槍、石斧、石鏃、貝腕輪、彌生式雅槍等多く、石器時代より金石期併用期に至る島の古文化を想見せしめる。此處を出て附近原ヶ辻にて土器類を各自採集した。次に名高い足利直義の安國寺利生塔のその一つに屬する老松山安國寺に至る。曆應二年開基、現今佛殿及山門は安永八年第二十一代陶嶺和尚再建と傳へ、本尊地藏大士等身坐像は開基當時のものと思はれる。當寺の高麗版大般若經は寫本及刊本兩方あるが、各卷の奥書には興味深きものがあつた。一、二を示せば、卷三十三のそれは、

菩薩戒弟子南膳部州高麗國金海府戶長禮院使許、珍壽特爲  
壽天長邦家地久隣兵永息福海增深次亡考尊靈法界衆生成無上道  
之願謹成六百般若經永充 供養重熙十五丙戌四月謹記 (異筆)  
看經比丘曇光 己巳十二月二日記

卷三十八のそれには

應永十四曆丁亥五月十四日 大願主源朝臣沙彌道休所伸懇志、  
無遺過去惡業當處消滅不期未來諸善法刹現成四生四民等發願心  
三經三重共超佛祖志也

途中車を止め島の典型的民家を見る。家屋配置等にも特色があるが、目に立つのは著しく丸く中高になつて居る畑に前畑の下手

にアンダメと稱する堀のある事等である。

芦邊附近海岸丘陵に於て晝食を喫し、蒙古軍が芦邊浦に碇泊せる時の礎石と云ふものなどを見つゝ、豊嶽山天徳寺に至る、平安時代紺紙金泥寫經(奉寄進宗圓禪定門云々奥書)古筆一冊等あり。次で折しも祭禮中の國片主神社に詣で、その附近の堀の遺址、國分寺址にその昔を偲び、鬼石窟と稱する横穴式古墳を見て、國幣中社住吉神社に參拜する。神功皇后三韓征伐の御歸途奉祀し給うたとの古傳説を有する上代よりの由緒ある社で、その社前二の鳥居は松浦鎮信公の貞享四年十一月建つる旨銘文を刻してある。掘社に軍越社三社あり、五月二十八日には神官が騎馬で巡拜神祕的祭事を行ふ由、壹岐は牛を大切にす所と云ふが此の神も牛の神として尊信されてゐると云ふ。其他島には牛に關する興味ある民俗がある様だ。それより蒙古と勇戦せし平景隆公の英靈を祭る新城神社に額づき、次に勝本の城山公園に登る。之は天正十九年秀吉が征韓役に際し松浦鎮信(前の鎮信の曾祖父)をして築かした武末城で石垣が残つて居る。頂上に石碑あり「春にわれ乞食やめども筑紫かな」と云ふ曾良の句を刻む。山頂より傾く夕日に辰の島更に一衣帯水の彼方に霞む對馬の島影を眺め淡い旅愁に打たれる。

勝本に夕食をとり再び陸丸上の人となつて對馬海峡を横切り、日野・歌野・中尾諸氏の御出迎を受けて嚴原の佐伯旅館に入つたのは午後九時半であつた。そして一時間経つたか經たぬに御公用にて急遽上京される西田先生に御別れしなければならぬ事は一同大

いに淋しく感じた事であつた。

第五日 十月十九日(水) 對馬(佐須、嚴原)

支海の激浪に揺られた疲勞未だ癒えず、一行の顔色冴えぬものがあるが、定刻日野・歌野兩氏の御東導にて自動車を驅り山を越えて西岸佐須浦に向ふ。壹岐は全島低平な丘陵が起伏し、水田や畑に乏しくないが、對馬の風物は全島峻峻な山に被はれ田畑少く壹岐の如きどやかさが見られず重苦しく心に迫るものがある。佐須浦に於て先づ縣社小茂田濱神社に詣づ。祭神宗助國並に一族將兵はこれ文永十一年十月元軍を此處に邀撃し衆寡敵せず玉碎せしところ、正平二十四年師大明神と號すと云ふ。次で櫻根の亞鉛鑛(銀其他も出る)山を見學する。此附近は銀山として既に上代に名あり、書紀、三代實錄に見ゆる所、又「對馬國貢銀記」にはその採掘の狀を載せてゐる。一日二百噸年産六百萬圓の生産計畫とは非常時日本に心強く、山下の曹洞宗法清寺に「國主御武運長久御銀山繁昌云々」の貞享二己丑年の棟札等を考へ合せ興味深きを覺えた。又同寺には藤原様式(時代は降るかも知れぬ)の木彫等身千手觀音立像や寺傳蒙古將來と云ふ異國的な丸厚い衣鍔を持つ重厚な木彫佛像十數體あり又同寺境内には宗助國公首塚胴塚がある。附近の民家の屋根が廣い平い石板で葺いてあるのも珍しかった。

午後は嚴原町内を見學、先づ南禪寺派宗務支所西山寺を訪れ、百長老赦免狀、同長老木彫等身坐像或は明神宗より釋玄蘇に與へた萬曆二十三年二月日付割符、同じく萬曆年間、神宗より玄蘇に與へた銅印の如き日鮮外交に關する史料を見る。次に荒廢した石

垣の残る宗氏居城址を過ぎて宗家菩提寺たる萬松寺に至り宗義智侯以下累代の墓に詣つ。同寺には徳川將軍より宗家に賜りしと云ふ歴代將軍位牌、家光より賜りしと云ふ天海僧正贊の徳川家康畫像一幅、小徳筆漁樵問答圖一幅等があつた。ついで縣社八幡神社に參拜す。同社藏平山樂自筆津島記事、附録編纂始末等計十三冊は有名な此地誌の原本を見るを得た譯であつた。安東府司とか金州官の如き銘、或は狩獵文のある鈴敷筒や銅鏡等注目された。それより宗家記録庫を見學、雄藩に非ずと雖も流石に一藩の家記記録、文書類を蒐めた丈にその量の老大なる、時代は徳川初期より末期に至る迄、毎日記を始めあらゆる種類のものが残され、その一部は既に九州文化史研究所で見居たが全く一瞥を喫した。各方面の貴重な史料がある中にも日鮮交渉史關係のもの等特に大切なものが多い様に見受けられた。最後に夕園の中を國分寺を訪れ木彫薬師坐像を拜して歸る。午後十一時僅かの間の惣括たりし見學ではあつたが思出深き對馬を三度陸丸船上の人となつて離れたのであつた。

以上土地不案内な壹岐對馬の見學に於て不馴な我々をして壹岐に於ては鴉田忠正・山口麻太郎・目良龜久諸氏、對馬に於ては日野清三郎・歌野寅吉・中尾信吉其他諸氏には色々御面倒を煩はし無事に見學を終へしめられた事に對し深厚の感謝を申上ます。

〔横田健一記〕

第六日 十月二十日(木) 博多・佐賀・長崎

嚴原出帆が豫想外に遅れたのと、歸りの玄海が又々大荒れだつ

たので漸く博多の棧橋に着いたのが既に十時に近かつた。船中で立てた平戸廻り長崎行のプランが皆駄目となつたので、平戸か長崎か決定を迫られ、協議の後、残念ながら平戸を割愛長崎行とした。然し長崎へ直行しては暇がありすぎるので、途中佐賀を見ることとして、十一時二十分博多出發。鳥栖にて珍しくも水野先輩と會ひ、一時過ぎ佐賀に着く。近田君の案内で徴古館を見學、鍋島家關係のものが多く藏されて居る。鍋島直茂、同勝茂に宛てたる朝鮮陣の部署、其他重要心得を記した豊太閤の指令書。天正二十年朝鮮國に公布せる太閤の制令采印は世に太閤虫喰判と稱するもの。朝鮮國二王子書簡。史記(慶長活字版)。羅馬法皇ピオ七世自筆禁令書。唐津燒破片(齊明、清和時代)等は注目すべく、又佐賀藩鐵砲沿革史原稿。精練方研究調書(六帖や、愚見集(山本常朝自筆、葉隠武士道の精神を説く)はそれぞれに面白いものであらう。時間がないのでざつと見て、それから閑叟公の銅像や佐賀城を一巡、三時十八分佐賀發(柴田先生はここから歸られた)。暮れかゝる温泉岳を左手に眺めつゝ、六時二十八分長崎着。伏見・菱谷・中村の三氏の御出迎を受けて一昨年と同じく福屋旅館に投宿。明日は防空演習とのことなので夕食後諸先輩の御案内にて夜の長崎を見物、西鶴をして「長崎に丸山といふ處なくば上方の金銀無事に歸宅すべし。」と言はしめた丸山は今もなほ盛である

第七日 十月二十一日(金) 長崎

長崎は屢々見學個所に取入れられ、近くは昭和十一年に訪れて居り、その見學記は「史林」第二十二卷第一號に詳細に叙述されて

居るから、以下なるべく重複を避けて簡単な記述に止むることとする。

前回と同じく先づ縣立圖書館を訪れる。今回も館長増田氏の御好意により史料陳列室を見せていたゞくことが出来た。前回のもの、外に、「御水帳」、「安政條約條文」、「安南國王金札解」、「明治初年文部省の命令により編纂せる郷土史料稿本」、「繙譯滿語纂編(全十冊)」、「エゲレス語辭書和解(全七冊)」、長崎に關係する凡ゆる資料の分類抜粹「金井八朗備考録」(全二十冊)「船載書籍の目錄」「書籍元帳」、「青方文書」、「諫早日記」(約二千冊)、「蘭館關係繪圖」(殆んど動物繪圖)等が重なるものであつた。諏訪神社は參拜に止め、徒歩春徳寺よりシーボルト宅址へ廻る。晝餐は又も上記三氏の御好意により通天閣にて支那料理の御馳走にあづかつた。名物である上に、先輩諸氏の御厚情身に泌みてはるばるとのしき一時であつた。午後は先づ支那街を一巡する。菱谷武平氏の御説明によれば「寛永十六年幕府が支那船の入港を長崎のみに限定するや支那貿易は激増し、支那人は貨物は海濱の町家の土藏を借用して之を藏し、己は町方に宿して自由に商賣したが、後和蘭人同様一所に之を集居せしむることとなり、元祿三年唐館が造營された。爾來二百年唐館は日支貿易の根據となつたが、明治後唐館は廢止され現在支那人は陸續きの荷藏に居住して居る。」とのことである。天后堂、觀音堂、土神堂、靈魂堂、福建會館、廣東會館を含む總坪數九千三百六十三坪の地域であるが、今はそれらの建物も荒れて、天后堂に残る珍しき唐船の模型も塵まみれである。

そこを通つて高島秋帆舊宅へ至る。幕末の砲術家、秋帆が門弟を指導したところで前庭には射的場の址や標的に用ひたる彈痕石が残つてゐる。明僧超然が寛永六年に開基したと言ふ崇福寺は支那の寺の如き感じをよく傳へてゐる。明末歸化支那人が媽祖(船の神様、女姿、日本の金毘羅様の如きもの)を祭り海上安全祈禱の道場をひらいたのがその初まりだと言ふ。ここより自動車にて大浦天主堂より浦上天主堂へ。信徒の人であらう、小學生にラテン語の讚美歌を教へてゐる。その聲を聞きながら、之も信徒が數十年かかつて作り上げたと言ふ大教會堂を仰げば、自ら世界を異にした思ひである。六十の坂を越したであらう老婆の敬虔にささげる祈りの姿に三百年の歴史を通しての姿がしのばれる。自動車を棄てて福濟寺の樓門をくぐつた時は早や暮氣が立ちこめて防空演習をひかへての全市は今や暗黒に呑まれんとしてゐた。境内の大燈籠は恐らくは今日の如くであらう三百年前の長崎の港に如何に希望の光として輝いたであらうか。福濟寺を出る頃より非常管制に入り出島に到着した時には折しも敵機襲來して、投げ下す曳光彈は赤に青にまたたき、打出す高射砲の轟音は出島にも漲つた。一人々々ひそかに懐中電燈の光を頼りに瞥見した出島蘭館の礎石は(WVO)と讀まれた。WVOの文字は當時の和蘭東印度第十六代目總督、ウイレム、ファン、オウトホウエルン氏の略字であらうと言ふことである。一日の行程を終へて宿屋へ歸つたのが午後七時。かくて午後十一時、中村氏の御見送りをいたゞいて管制下の長崎を後にしたのである。我々のため案内に交渉に、御多忙中に

拘らず御厚意を示された中村・伏見・菱谷三先輩に無限の感謝を  
 殘しつゝ。

第八日(土) 十月二十二日 宮島

七時五十分門司着。折しも廣東陥落の報があり、人々の面上に  
 押へ切れぬ喜びの色が現れてゐる。八時五十分下關發の急行で宮  
 島へ向ふ。正午宮島着。鴛淵・加計兩氏及び清原夫人の出迎へを  
 受け直ちにモーターボートで嚴島へ渡る。岩惣に於て清原先生の  
 御招待にあづかり晝餐を御馳走になつた。それより嚴島神社に參  
 拜。禰宜の方の御説明で社殿及寶物殿を拜觀。三千五百點を數へ  
 る寶物の中、寶物殿に出してゐるのは百點餘りと聞く。足利家執  
 事飯尾彦六左右衛門書御成敗式目、義家、義光の用ひたと傳へ  
 る日本で一番古い甲冑。應宣國宣等を輯集せる御判物帖(二帖)、  
 藤原末より鎌倉にかけての大小十四體の狛犬、平家納經複本(三  
 十四卷)(國寶)、燈籠(青銅製、正平二十一年の銘あり)、辨慶の玩  
 具と傳ふる木造飾馬、後奈良天皇御宸筆大鳥居扁額(二面)等はそ  
 の中の重なるものである。四時四分清原先生等に見送られて宮島  
 を發車、恙なく旅程を終へて一路京都へ。

終りに臨み今回の旅行に際し各地に於て何時に變らぬ御厚情を  
 示され、多大の便宜を我々に與へられた幾多の先輩並に御多忙中  
 をわざ／＼色々とお世話下さつた各地の諸氏に對して厚く御禮申  
 上げます。(續續重正記)

### 第三回神道史資料展觀概要

我が國史研究室の催しとして神道史料の展觀を陳列館階上に十  
 一月十九、二十日兩日と二十三日半日の間開いて、これで回を重  
 める三たびとなつた。例の様に資料蒐集を近畿地方と限つたが、  
 しかし前回とは別に面目を新たにし、現下の世情に鑑み戰時色  
 をば織りこめる積りで、その部目を皇室、國家並に軍事戰役關係  
 の崇敬といふことに主眼を置いて立てた。而してそれに兼ねて諸  
 種の民間信仰をも配した。今、次にその概要を記さう。

第一部 皇室の御崇信、國家の崇敬 主に第一室に陳列された。

甲、皇室の神宮御奉齋と皇祖御崇敬 第一に仰がれたのは明治  
 天皇神宮行幸繪卷である。明治二年三月御東遷に際しての御親拜  
 の御模様を眼のあたりに拜するを感じ、維新劈頭曠古の御盛儀と  
 して範を後代に垂れさせたまうた御遺徳をば思ふ。第一卷京師御  
 進發の圖、第二卷神宮御親謁の圖 昭和四年中村左洲氏謹寫、神  
 宮徵古館農業館所藏。次に、勅使渡遣奉幣の例に古く永正十五年  
 十一月の一社奉幣の記が展べられた。神宮文庫藏するところ。五  
 色の綾絹、兩面、木綿、麻、調布の奉送が伺はる。又、慶長十四  
 年九月神嘗祭日に於ける伊勢一社奉幣次第の記録は公爵近衛家所  
 藏本學寄託に係る。なほ、江戸時代の公卿勅使日時定次第などの  
 出陳拾數點に及んだ。神嘗祭奉幣内藏寮送文一通(神宮徵古館農  
 業館藏)は文久二年九月豐受宮に五色帛、木綿、庸布、柳宮明體  
 の例幣料が奉送されたことに關するもの。又、伊勢勅使部類記、  
 勅幣中興記(丙題正保四年九月公卿勅使參宮日記)が見られた。外  
 に、神馬奉納の仰に係る享祿四年後奈良天皇女房奉書(國史研究

室藏)が陳べられ、其他、南山城瓶原五ヶ村に於ける例幣使關係資料(瓶原村役場藏)などが出された。

遷宮關係資料として御巫清白氏所藏の永祿記が繕かれた。豊受宮の御造營に關したものである。内題に天文又は永祿とあつて、山口祭の目次、造宮使の祝詞など種々記さる。紙背に遷宮再興に力を盡した慶光院尼の文書が存する。神宮文庫所藏の天正正遷宮用途注文一通(天正十三年)には天正十年安土に於いて上様(信長)

から渡された參千貫文の代の中、内宮の料、糞料、山口祭神事料などの入用を示す。また、皇大神宮正遷宮次第一通には天武天皇白鳳十三年正遷宮はじまり役夫工米を御造料として宮敷八十末社に及びたること、寛正三年東山殿執行宮敷二十七御造料二萬八千貫、天正十三年度御遷宮に秀吉公執行御造料五千貫米五百石請取のことをば記す。なほ慶長十三年に於ける兩宮御造營諸祭日時官宣旨が七通ほど添へられた。別に、昭和御遷宮繪卷(神宮徴古館農業館所藏)、高取稚成氏謹寫十二卷の内、川原大祓、出御奏上の二巻が擇び抜かれた。こゝに新しく清々しき御模様を拜しうるだに畏き次第である。

大嘗會に於ける神宮奉幣の例に、永和元年度の外に貞享四年大嘗會御再興時の由奉幣記(度會延經記)、元文三年大嘗會伊勢記(度會智彦記)などが擧げられた。

神宮の御神事につき次のものが出された。皇太神宮年中行事(神宮文庫藏)、奥書に寛正五年一禰宜氏經記す由見えるもの、但それより後の寫本と見らる。外宮伊吹神事圖(神宮徴古館農業館藏)、

御巫内人石部清直圖鳥泉寫、尾張篠島から貢がれた忌饌の鯛を豊受宮玉出門前に供進する舊神事である。外宮豊宮崎御田祭圖、素勝行揃くもの一卷(神宮皇原齋館藏)、それと皇太神宮御田祭圖一卷(神宮文庫藏)大國土豊繪、これ政所太夫大土社を拜し、一禰宜里亭參り、田長ら豊年を祝して舞唱し、禰宜權禰宜諸役人等拜見するところ。また外宮豊宮崎御田祭版木(神宮徴古館農業館藏)及び同版畫(大西源一氏藏)は圖中に田上大水社山末社度會氏などを表はす。現今この神事は別宮伊雜宮のみに行はるといふ。

別に、祭主三品朝彦親王御謹書の御神號一幅(神宮文庫藏)をば拜す。また、兩宮境域圖(京都、今宮神社藏)、慶安二年の原本を新たに摹寫したもの、參考たり得。

茲に又、齋宮關係資料が集つたことは注目に値ひする。往昔、大神宮齋祀の任に當らせ給ふ皇女又は女王を齋王と稱へ、齋王の居給ふ所を齋宮と稱へた。その伊勢多氣の齋宮御遺址發見の土器が出版された。素焼の平瓮、杯、碗など大小七個と白磁皿二個及び青磁破片、これ文化文政頃御館上園下園樂殿等から掘出されたといふ。なほ、同御遺址出土の石帯の石一個も並ぶ。方一寸三分許、表に綠色條斑有り、裏にくゝり孔數個穿たる。蓋し延喜式所制齋宮寮の出仕官人らが帯んだ裝束の遺か。さて、これと併せ見るべきは齋宮村見取圖、承應三年のもの、「さいわうの宮」がくでん「かみその野」「しもその野」の名まで遺る。これに兩宮給人中總代が齋宮村郷中に出した五ヶ條の證文、並に齋宮惣野山之帳をも附し、さらに齋宮村御神領五ヶ村惣繪圖(天保八年の控)を隨

ふ。以上すべて乾覺郎氏所藏に屬する。參考に度會延經齋宮部類(神宮文庫藏)、御巫清直著齋宮寮廢蹟考、同圖及び同殿舎考證附錄並に齋王參宮繪圖(以上御巫清白氏藏)も列り、合せて齋宮考究に好資料を供する。

乙、國家的祭祀。祈年祭幣物目錄(日前國懸神宮藏)所掲の純、庸布、白布、麻、刀形、弓箭、槍杆、楯、和布、少魚、鹽、雜帛、卍酒、麥、寒鴉など、こは裏書によつて文永年度のものと知れる。又、後村上天皇興國元年水無瀬の後鳥羽院御影堂に領家職を寄せ先皇の御菩提を訪ひ以て四海安全を祈らしめ給ふ綸旨(水無瀬宮藏)、後光嚴院康安二年天下靜謐を祈禱され給ふ綸旨(近江、八幡神社藏)、後花園天皇永享六年松尾明神に五穀成熟を祈らせ給ふ宣命、降つて櫻町天皇延享元年國家守護を祈らせ給ふ宣命、後櫻町天皇明和五年寶位無窮御祈りの宣命(共に松尾神社藏)及び光格天皇文化元年並に孝明天皇元治元年甲子革令に際する御祈禳の宣命(平野神社藏)などが視かれ得た。

特に注意さるべきは、下御靈神社所藏國寶靈元院御宸筆願書一幅で、法皇が享保十七年社前に無病息災、朝府屏退、朝成恢興を御祈願あつて朝權復古の御宸慮を懷かせ給うたことが、これによつて明察され得、後年御躬ら天中柱皇神と祭らせられるに至つたことも尊く感ぜらる。又更に、幕末外夷來航開國を促し朝幕關係緊迫するに及んで孝明天皇が國體安穩萬民和平を御祈禱めそばれる綸旨(能野那智神社藏)、祝詞案(龍田神社藏)が展べられ、國家を御軫念めそばされた御事を憶ふも畏い。

丙、諸神詣社崇敬。嘉元徳治の頃東大寺八幡御遷宮御興に關する後宇多院々宣(手向山神社藏)、正和三年造住吉社段米に事の係る後伏見院々宣(水無瀬宮藏)、松尾社領山本庄雀部庄の知行安堵についての後醍醐天皇綸旨(元弘三年、建武二年)、若宮八幡宮社地御寄進の光嚴院々宣(康永四年)、出石社神官に宛てられ建武の官府に任せて祈禱すべき由の後村上天皇綸旨(正中六年)、祇園社(八坂神社)造營料所に關する後光嚴院綸旨(應安三年)、離宮八幡宮日使役に係る後花園院々宣(寛正五年)、または後陽成天皇御宸翰木島明神御神號並古歌一幅(京都靈養神社藏)、元和五年多武峯太織冠御遷宮勅使御參向次第記(談山神社藏)、春日祭についての後水尾天皇御抄物寫(大原野神社藏)、並に同上皇の盡敬天皇廣前奉上祝詞(藤森神社藏)、新日吉祭禮についての光格天皇女房奉書及び新日吉御所御鎮守祠前中宮御宸筆御祈神樂次第(新日吉神社藏)、大宮御所御祈禱の書狀(眞幡寸神社藏)、又、正應の御代より代々の例となれる北野祭御再興に就いての慶應四年並に明治二年の宣命(北野神社藏)の外、豊國社神位記寫(子爵萩原兼武氏藏)、寶曆六年神道行事再興伯家御教書(建部神社藏)などが並べられた。なほ、昌泰以後正嘉頃までの宇佐使發遣の記事などを蒐め附するに延享の興繼を録した列朝宇佐記一冊(樋口宗武抄河北景植按)が見られた。その他、異色あるものとして後白河法皇熊野御幸新宮那智圖二幅(京都、能野若王子神社藏)は足利期の古さを見せ、瓶原村役場の藏する日光例幣禁裏御制札一面は徳川期の新しさを匂はせた。



附けて茲に見るべきもの天野山金剛寺所藏大藏詞殘缺がある。初め建武元年但州朝倉庄で書寫されたのを後に建徳二年に書寫校點したもの、梵天帝釋四大天王或は天宮殿などと傍注し、被詞が佛者にまで採り入れられた神佛習合時代の珍奇を示す。

第二部 軍事戦役に關する崇敬 第二並に第三室、一部は第四室をも占めた。

甲、軍事並に戰時に於ける信仰。先づ擧ぐべきは宮崎宮敵國降伏御宸翰紺紙金泥明治復製一帖(内務省神社局藏)で、三十七葉より成る。醍醐天皇延長年間八幡大神の託宣に靈感あつて御親書、以て本宮に納められたと傳へ、文永弘安外寇來襲の時神威發現あつたといふ。これと共に、國史研究室所藏の蒙古降伏祈願開白支一通及び異國祈禱宸勝十講々師問者交名一通、一つは文永六七年の交石清水八幡大菩薩寶前に正傳寺宏覺禪師が聖朝安穩萬國降伏を祈願したもの、他は弘安四年東大寺八幡宮にて執行された異國祈禱の廻狀、また壬生菅務家日記抄一卷、即ち弘安四年中頃の日記、その中元寇に際し伊勢公卿勅使發遣、二十二社奉幣あつた事など見えるもの、いづれも重要な史料である。第一室に仰ぎ見られた風宮額面は、この外寇にあつて神助發顯の事あらせられた伊勢神宮別宮風宮に明治以前掲げられぬといふ。今、神宮徴古館農業館の保藏に係る。次いで、春日神社所藏後深草院々宣並に長者宣は、正應二年復た蒙古の凶賊が觀親の心をあらはしたによつて祈禱なす可き旨を宣へ給ひ、又これを奉じ興福寺別當に傳へたものとする。

又、兵亂に當り武將が天下の靜謐を祈つた例には、將軍御教書中、足利義持のそれは應永六年大内氏亂の時、義政のそれは應仁元年の亂の時のもの(並に今宮神社藏)があり、又、天正二十年毛利輝元が朝鮮征伐出陣の砌、太神宮御寶前に武命安全歸朝の上御造營の事成就を祈念したもの(國史研究室藏)がある。

特に、嘉永安政以降幕末内外多事の際の資料が多く見られた。

即ち、嘉永七年三月孝明天皇御沙汰書(龍田、丹生川上、熊野那智神社藏)や攘夷御祈願祝詞(龍田神社藏)には、去年以來異國夷類ら東海に來り交易を求め其情狡猾、今年正月魯西亞船西壠に歸帆を揚げたが、中甸には亞美利加船復た東海に來り人心不穩に付邊海を防禦警戒し、弘安度蒙古夷賊退散の例に任せて夷類歸伏、國家清平、神明の冥助を以て神州を汚さず人民を損せざる様にと、武運延長の御祈りが發はれ、同年十一月井伊直弼の夷賊掃攘祈願祝詞(春日神社藏)あること亦知られた。又、近來外夷跋扈、夷の軍艦橫濱に來り兵端を開くべき情なるによつて醜夷掃攘の旨の御沙汰書(熊野那智神社藏)も陳べられ、又、安政五年異國降伏御祈願祝詞(龍田神社藏)に、去嘉永六年六月頃東夷北狄ら黒烟を立て火車を沖に飛して西より東より渡來今に絶えざるによつて、黒夷の醜類を弘安神助の例により退散すべきことが告げられた。其他、文久二年十一月祝詞案(龍田神社藏)に近來世間不穩、宸襟猶不緩なるにより朝廷玄來の御密附あり、武運長久萬民和樂の御祈の勅命あつたことを覗かしめ、城南離宮御小休所繪圖(眞噲寸神社藏)の拜殿前に設けられた御休座所の圖に文久三年四月の石清水行幸

の御事を想はしめる。なほ、慶應四年正月御祈禱の御會符預り狀並に御幣物の木札(同上社藏)も存する。上に擧げた北野神社所藏明治天皇宣命(慶應四年及び明治二年)には、辭別て今大政舊弊一洗君臣勳勵、陸奥出羽の頑賊平定、正しき大御代とならしめ給はむと祈念あそばされてゐる。更に、慶應四年六月明治天皇は熱田宮に勅使廣幡内大臣を參向せしめられ、その宣命(熱田神宮藏)に、近來天下の形勢推移に應じ海外諸藩と交際の道を聞き給ふを以て天神地祇に奉誓して治國の基礎を立て、賊徒征討、浪華行幸また間無く皇軍江戸城に入つて還幸、奥羽賊徒の鎮定を御祈請あつてこゝに萬機一新の狀を告げたまひ、神威の明助に依り神世の遺策に違はず皇政を天下に輝し給へと申したまうた。大御心を拜すれば畏しとも畏き極みである。

乙、武人の信仰 源賴朝の壽永三年廣田社領寄進狀案及び松尾社領に關する建久七年下知狀、足利尊氏曆應五年粟津別保を新羅社に寄進し、義滿亦慶應二年知行を安堵せる狀々(園城寺藏)並に新羅明神畫像(足利時代畫くところ延寶の修覆を加ふ)及び御縁起(承應寫)、又は東大寺八幡宮(應安四年)、離宮八幡宮(明德三年)の義滿御教書、熊野那智社(嘉吉元年)の義政御教書などが列なつた外に、離宮八幡宮の大山崎禪人に關する楠木正儀下知狀(承和三年)も交つた。たゞ忠義王が乙亥の年熊野權現那智の寶殿前に遷宮、社領寄進、毎年代官參詣、御劍禪馬奉納の諸事は所願成就の時にその成敗あるべしとて祈られたといふ立願文を見出したのは寧ろ珍稀とするのみ。又、弘治二年今川義元安堵狀(熊野那智

神社藏)、天正五年織田信長社領安堵狀(松尾神社藏)、天正十一年豊臣秀吉安堵狀並に朱印狀(土師神社藏)、さては福島正則が天正十八年豫州北條村二百石を、羽柴照政が參州竹原郷二百石を寄進した狀々(並に神宮徴古館農業館藏)、または豊臣秀頼が慶長八年片桐且元奉行にて社殿再興の爲の寄進狀(大阪、玉祖神社藏)など戰國武將數々の奉養察するに足るものがある。又、降つては徳川家光、家綱(大原野神社藏)、膳所藩主本多、菅沼、戸田、石河諸氏代々(建部神社藏)の寄進狀もあつた。

遺物にては、武神として頼朝ら武將の崇敬をも受けた建部神社の藏する神像男神女神坐像二軀は葵裝束の表現を窺はしめたる古色掬すべきもの、又、弘安或は曆應の銘在る熊野西中兩御前或は證誠殿御正琳をあらはした懸佛(熊野若王子神社藏)、觀應の銘を納櫃に見得るといはれる白綾緘腹卷(附屬品共)一領、草履一口(並に近江、兵主神社藏、重要美術品)は亦これ中世武家の信仰の一面を物語るもの。近世のものでは枚岡神社の藏品なる橋擬寶珠一個、それに「河州平岡大明神神橋、豐臣朝臣秀頼卿再興慶長七年壬寅十一月吉日、奉行桑山市右衛門尉重正造之」と刻銘がある。

第三部 民間崇敬 第二、第三室の一部と主に第四室を充たし、庶民の神祇信仰の一斑を表して亦興趣を添へた。

甲、地方村落に於ける信仰 衆庶一般參宮詣者に知られる太々神樂の圖版本一面(神宮徴古館農業館藏)を初め、別に天治二年隅田八幡宮社家隅田氏祖の解狀(隅田市兵衛氏藏)、天文二十三年春日社氏人に係る長者宣(春日神社藏)、或は天文の頃阿闍梨らが讀

み上げた若狭國々内神明帳(中村直勝氏藏)の外は、地方的團結や  
農村味豊かな材料種々。即ち、文和三年又、應安三年頃江州大島  
奥津島南村に於ける江入場の寄進狀及び祭禮神供料の定書(大島  
奥津島神社藏)、明德元年大山崎神人改補に係る義滿御教書、又は  
永祿十一年惣申連署の起請文(鎌宮八幡宮藏)、永享二年稀雨の際  
若宮權現の神威を請うて植付苗の生長を祈る雨乞記録及び文明十  
四年天王社雨乞の布施書上、又、明應二年頃書寫の近江栗太北郡  
總村天王社相摸頭役里人次第及び總村五郷御頭糴米事など記し  
た古帳(天寶神社藏)、元龜三年頃在々百姓らが納入起請文の寫  
(近江勝部神社藏)、又、平岡大明神に祈雨する高内式部丞の書狀  
及び近衛基熙雨乞歌並に平岡社御粥引付日記及び御粥神事用火切  
杵火切白一式、元和二年比牟禮社の鳥居造立に付村氏子町惣中代  
官惣社人大工鍛冶ら奉加の記(八幡神社藏)、または寶曆頃伊勢度  
會の庄村、山田原、西村、今一色、三津、江村、松下諸郷の氏神  
社、蘇民將來社、江村明神社、堅田社、三津村天神、立石三宮祭  
禮の事を記せる郷々諸祭禮式目一冊、天和の古帳を寛延に寫した  
もの(神宮文庫藏)。なほ、太永四年庚申神事の酒肴料に付廻文(松  
尾神社藏)、祇園社神事に付奉願口上書案(八坂神社藏)や東國に  
て疫癘消散の爲麥藥と青竹を以て造つた祇園社頓宮に於いて行は  
れる神事の版畫圖(田中緑紅氏藏)、其他やすらひ祭歌の斷簡(今  
宮神社藏)、例祭籠頭舞の籠頭、御田植祭の牛頭(大和神社藏)、田  
樂神事用具(丹波、矢代日吉神社藏)、大弊神事用具(縣神社藏)、  
南山城祝園並に棚倉神社祭具、丹波桑田佐伯燈籠祭人形、丹波大

原神社子安砂並に神符、宇田田原宮座、瓶原村天滿宮々座、子  
大明神御神事座衆關係資料(京都師範學校藏)、綱打神事圖(長等  
神社藏)、御田言立譜及び左義長松明模倣(八幡神社藏)、外に愛  
知縣に於ける特殊神事寫眞類など。

乙、教育學藝に關する信仰 和歌の神玉津島明神の御神號は後  
奈良天皇並に後陽成天皇御宸翰の二幅(玉津島並に和歌浦天滿宮  
藏)に拜まれ、玉津島社法樂和歌短冊綴には、後西(寛文(靈元(天  
和)櫻町(延享)桃園(寶曆)後櫻町(明和)光格(寛政)仁孝(天保)御  
代々帝の御宸筆御製並に御歌題に次いで閑院宮桂宮有栖川宮諸親  
王の和歌のほか堂上家の歌が多い。多武峯社御法樂和歌一卷は永  
正十七年、聖廟御法樂和歌一箱は寛文四年のもの。夙く院政時代  
の昔人磨影供あつてよりこの方、その神形は歌神と崇められるに  
至つた。聖護院所藏押繪像には後水尾天皇御宸筆御色紙が貼られ  
御巫清白氏所藏丸神形には有栖川宮熾仁親王明石の浦並に梅の  
花の古詠御筆が題さる。正一位柿本大明神神號及び人丸神像圖は  
柿本神社の藏品、また、近衛信尹筆人磨並に自贊歌(岩井武俊氏  
藏)、其他に人丸社奉納詠歌も出される。轉じて「火とまる」の俗  
信仰から火防靈驗神札さへも出來た。この外、方術について元亨  
二年典藥頭兼侍醫頭丹波朝臣が權侍醫員世に授けた重舌符術の相  
傳狀寫(國史研究室藏)、また酒井伊織奉納の方氏墨譜刊本(氣比  
神宮藏)は亦珍として可い。その他、藝能につき、精大明神並御  
社之記一卷(宮地直一氏藏)、承元二年四月庚申の日蹴鞠の道に御  
堪能なる後鳥羽上皇が蹴鞠神を祭らせられる宣命案、それに附隨

して飛鳥井雅經に仰せ鞠精の社を御建立なされしこと、並にその社地圖、應永の雅猷、寛永の雅宣の造管申狀など添はつたものがある。なほ、御供米袋受納帳一帖(大阪、綱敷天神社藏)は弘化三年浪華の諸寺子屋から上納した供米の受納記、これ亦天満宮信仰の一端をば示す。算術上達祈請の爲の奉納繪馬の例に、文政十一年奉納算題五事として俵積圖や鈎股の術を解き、關流の名を銘したものの(正法寺藏)、今一つ文久三年御香宮に奉納され、日下開算西岡流算題と冠らせて、直線圓弧圖を表し問八題の術を解き、これに畿内所々濃州能州に互る諸方門人を列記したものを見た。

丙、諸職業に關する信仰 松尾社の酒由來之事一通は、祭神鳴鏑坐大山咋命が神代に松尾分土山に神集ひあつた時神慮により山田の米を蒸し清流の水を汲んで一夜に酒を造り、大杉谷の杉を以て器を構へて諸神を饗應し給うたと説き、大神社の杉、亦三輪の神杉に結び醸酒に因んだ信仰をも繋ぐ。また、梅宮御神徳記(天保寫)、これ亦酒解神に縁りて造酒の徳を傳ふ。他に、離宮八幡宮の御遷宮記や鳥居再建寄進帳は製油の由來を述べ。

次に工匠に關して、春日社御廓造管時葺工久國なる者の申狀及び興福寺南大門葺工等交名注進狀(文治三年)、手向山社に存する東大寺繪所記(自天文四年至元龜三年)、石工について、享保十六年妙法院御門跡鎮守新日吉社の神前鳥居の建立に奉仕した石工の出雲官名及び藤原氏相傳の免許狀、木地師の傳統につき、その祖神と仰がれる小野宮惟喬親王の御偉績の考や轆轤師記錄などが並んだ。その外、高樞圖の繪馬(今宮神社藏)には繁榮講の名まで見

受けた。

更に、遊藝方面にわたつて、西宮社の遺君坊百太夫版木並に由緒記は操人形元祖の事を稱へ、蟬丸社藏する蟬丸宮假名緣起略註並に説教免許狀及び説教座芝居名代並末流免許控は、遊藝師の信仰を集めた當宮の別當所より出される免許狀が幕末からつい近年にも及んで隣國殊に中國筋の俗間にまで流布したことを物語つて面白い。

終りに、この展觀の特別出陳として、櫻原神宮神域擴張工事現場に於ける最近の出土品數點を展列し得て、大いに異彩を加へることが出来たが、その有頭石棒、磨製石斧の斷片や繩文土器殊に乳房の強く膨出したる女性土偶人が衆目を張らしめ、我が石器時代人の信仰方面の一端をも考へ窺はしめるに足るものあつて、特に興味をそゝつたことを附記する。(昭和十三年十一月加藤竹男記)

### 國史研究室採訪の古文書

國史研究室に於いて昨夏以來採訪影寫せる主なる古文書は山城神護寺文書、同高神社文書、同萩原兼武子爵所藏文書、近江胡宮神社、同多賀神社文書等である。今その内容を簡單に紹介すれば、神護寺文書 神護寺文書はすでに文覺上人書狀案が國寶に指定され、或は賴朝書狀、平政子自筆書狀が存することにより、世間に知られてゐるものである。目下京都博物館寄托中で、全部で十九卷あり、約三百通の文書を收めてゐる。文書の時代は平安朝の末から南北朝の間のもので、その中でも鎌倉時代のもの大部分

を占めてゐる。

平政子自筆書狀は、正治元年六月三十日、娘三幡が死去したに付き、神護寺より悔みの書狀に接し、それに對して返事したものと思はれるが、その簡単な文言の内にも切々の情をよく表はし、又莊麗な文字に至つては、尼將軍と云はれた政子に相應しいものと思はれる。

まとまつたものとしては、神護寺中興の文覺、その弟子淨覺、明惠等のものがある。淨覺は行慈と稱し、早くから文覺に侍し、文覺の配流に從つて流浪の生活を送つたこともある人で、その手になる文書は、神護寺の將來を思ふて寺僧を誡めたもの、或は伽藍の再建・維持に關して配慮せるもの等、神護寺を思ふ至情の溢れたものが多く、文覺のよき後繼者たることを示してゐる。明惠書狀の中には、明惠が三十三歳の時恐らくはその師に宛てて書いたと思はれるもの一通があり、師を慕ふ心、學問に對する熱情が細々と書き記されてあるが、偽らざる心を打明けた文章は一言一句人の胸に迫るものがある。

更らに又弘法大師自筆の金泥曼茶羅が高野山より神護寺へ返却せられる經緯を示す元暦元年八月二十八日の院宣(親宗奉)、或は後宇多天皇がその曼茶羅を修復し給ひし時の關係文書、或は宅磨勝實の系統と思はれる法橋俊實の屋敷地に關する文書、或は佛師堯圓に關する文書などは、斷片的なものではあるが貴重な史料を提供するものと思はれる。

名門名家の筆蹟としては、高階泰經、葉季顯頼、同宗頼のもの

を始として、梶原景時、自筆か否か疑はしいが新田義貞のもの等がある。

猶又寺領關係の方面より見れば、丹波國吉富庄、播磨國福井庄、備中國足守庄、若狹國西津庄、紀伊國排田庄、同神野眞國庄、同河上庄等に關するものである。殊に興味深きは、應長二年の福井庄の訴訟文書で、紀伊國の湯淺黨が、神護寺を中介として遠く播磨國にまで勢力をのばしてゐたことを知りうる。鎌倉時代の地頭の勢力伸張を考へる上で貴重な史料と思はれる。

以上は從來知られてゐたものであるが、その外に今回新に採訪したものに、元亨四年六月二十三日の後宇多天皇御遺言十二ヶ條一卷、及び嘉祿二年三月二十七日の北白川院勅願文一卷がある。

後宇多天皇御遺言十二ヶ條は、大覺寺所藏の「大覺寺譜」或は「大覺寺門跡略記」の中に採録されてゐたが、それ等が徳川末期の寫し或は編纂であつた爲め、從來問題にされなかつたのであつた。所が今回神護寺の寶庫より後宇多天皇崩御を去ること遠からぬ時代の寫しが發見され、後宇多天皇御遺言十二ヶ條の存在が確實と考へられることになつた。内容は、大覺寺所藏の「後宇多天皇宸筆御手印御遺告」と相通するものであるが、崩御の二日前の元亨四年六月二十三日、大覺寺の僧侶の行狀に關し誡めおかれたものと拜察し奉る。猶又今回の發見により、今後宸筆の御遺言十二ヶ條の發見も期待されるであらう。

北白川院勅願文は、近く「美術研究」第四十七號に「神護寺諸堂記」として紹介されたものであるが、今回考證の結果、嘉祿二

年三月二十七日、北白川院の勅願文であることが確められ、尙一卷の中多少の錯簡の存することも判明した。

高神社文書 京都府綴喜郡多賀村に鎮座まします郷社高神社の所藏に屬する文書で、現今社司宮崎愛次郎氏が保管されてゐる。

明治以後のものを除き、點數は約二百點に達する。その中で最も注意を惹くものは、文永八年二月、作事奉行阿闍梨弘辨の手になる高神社造營記一巻である。即ち高神社の寶殿が、仁平年中の造立より百二十餘年を経て痛く汚損せし爲め、不要になつた兵亂米を基として、それに氏人殿原の寄捨を加へ、社殿を造替した時の記録で、内容を仔細に檢する時、鎌倉末期に於ける地方の經濟狀態、特に貨幣經濟の農村への浸透を知りうるものとして興味が深い。

これに類するものに、永正六年十一月二十一日の高神社造營記、大永三年十一月二十四日の高神社寶堅記録がある。

その他のものは、殆ど全部江戸末期のものであるが、宇治の檜皮屋、八幡の太鼓屋との交渉を示す文書は、當時の農村の經濟圈を考へる點に於て、又高神社と毘沙門寺との間に、天保年間より嘉永年間に互つて交へられた一連の訴訟事件は、神佛分離の問題を考へる點に於て、夫々問題とさるべきものと思はれる。

萩原兼武子爵所藏文書 萩原家は卜部氏、徳川時代の初期吉田兼英の兄兼從、吉田家より分れて萩原家を立て、豊國神社の社家として明治に至つた舊家である。

所藏文書は、極めて新しいものを除き約百五十點に達する。

就中注目すべきは、後奈良天皇宸翰御歌集一巻、後西天皇宸翰御歌題一通を始として、鳥丸光廣の書狀八通、近衛家熙の書狀一通等である。

その他の文書は、戰國末のもの數通を除き、他はすべて徳川時代のものである。豊國神社の創建、豊國廟の破壊などに關する史料も期待を裏切つて極めて少なく、又神道史上問題となるべき文書も少ない。唯徳川初期の豊國神社造替に關し幕府と往復した書翰、或は徳川中期の公卿の消息、或は萩原家累代の書翰などに聊かまとまつたものを見得るに過ぎない。

胡宮神社文書 滋賀縣犬上郡多賀村に鎮座まします胡宮神社の所藏に屬する文書で、目下京都博物館寄托中の五輪塔一基及びそれに附屬する重源自筆の寄進狀一通(共に國寶)、更らに同じく寄托中の重源自筆書狀、延慶二年の太政官符を除けば、僅か十點近くの文書が保存されてゐるにすぎぬ。

殆ど凡て敏滿寺に關する文書で、就中注目すべきは、文曆二年七月日の佛舍利相承系圖である。即ち佛舍利が白河上皇より數代の間順次相承され文曆二年七月に敏滿寺に施入されるに至つた経路を示すもので、極めて珍らしいものとせらる。

次いで、天治年間より鎌倉時代を通じての敏滿寺に關する史料を斷續的に書寫したものが一巻あり、その中には異國降伏の御祈に關するものが見える。その他は、足利將軍御教書、細川勝元下知狀等である。

多賀神社文書 滋賀縣犬上郡多賀村に鎮座まします多賀神社の

所藏に屬する文書で、整理された分は十六卷百十三通に達する。大體鎌倉時代の末期より徳川時代の初期に至る間のもので、鎌倉末期の所領の争論の文書、南北朝時代の社殿造替の文書、戰國時代の信長、秀吉以下近江を中心とする武將の書狀等が重なるものである。内容の詳細はすでに「多賀神社史」に紹介されてゐるからこゝには主なるものを列記するに止めて置く。

一、豐樂門院(後奈良天皇御母)御自筆女房文

一、五辻宮令旨

一、武田信玄祈願文

一、豊臣秀吉大政所病平癒祈願文

今堀日吉神社文書 大正の初年、蒲生郡誌編纂委員中川泉三氏によつて採訪され、三浦周行博士によつて紹介された今堀日吉神社文書は、地方に於ける座の状態を知る上で貴重な史料として有名なものである。

その後同文書は、蒲生郡志卷五の商業志、或は滋賀縣史第五卷に採録され、研究家の利用に供せられてゐたが、未だその全貌を見る事が出来なかつた。幸當研究室に於ては、昨年第二回神道史資料特別展觀を催すに當り、今堀日吉神社關係者一同の御好意により借用することが出来たので、それを機會に影寫本を作製したのである。已に一部分の活字本はあるが、その足らざる所、或は誤まれる所を補はんとするに外ならない。(田井啓吉記)

## 讀 史 會

茶話會 十一月九日(水)樂友會館第一號室に於いて、壹岐對馬旅行の報告を中心に茶話會を開いた。出席者西田教授以下卒業生學生等十數名、くつろいだ茶話に一同歡を盡した。

大會 十一月二十三日(水)、新嘗祭午後一時三十分より樂友會館講堂に於いて開催、左の如き講演があつた。來會者約百名、會後有志者は更に晩餐を共にし九時頃散會した。

塵袋に見えたる奈具社の傳説

村山 修一氏

古代史の成立について神話及び傳説の重要な事は言ふまでもないが其れは古代に於て完成したのではなく時代の移ると共に後代の人々によりて受繼がれ新なる意味を持たしめられる。殊に傳説に於ては平安末より佛教庶民化の趨勢につれて僧侶によりて取り上げられその教化に資せられたのである。文永弘安の頃出來たといはれる塵袋の中に取り上げられた丹後國奈具社の傳説もこの意味で重要視されねばならぬ。その内容は丹後風土記の其れと同様ではあるがたゞ宇賀神はここでは福神として取りあげられる。茲に吾々は佛教に於ける福德(辨財)信仰との結合を見ると共に庶民生活に於て日常の風俗習慣の起源を傳説といふ一回限りの事件に結びつけるといふ歴史的なものへの追求の心を見るのである。

歴史家としての伊達宗廣

高瀬 重雄氏

歌人としての彼については従前佐々木・森等の諸氏によりて考究せられ、又歴史家としての彼についても内藤湖南博士が早く其の重要性を認められた。たゞ從來の研究に於ける共通的缺陷は前

後の歴史著作との關聯、及び彼の生きた時代との關係の看過せられた點にある。彼は幕末紀伊の舜泰侯に仕へ大いに信任を受けた。其の「大政三轉考」もと舜泰侯との談話の形式であつた事はいふまでもない。(この書は彼の幽閉の四年前に出來たので幽閉とは直接の關係なし)其の日本史の三時代區分は愚管抄(彼が之れを讀んでゐた事は確證せられる)が讀史餘論にすら見られる年代區分の痕跡を全然止めず彼の獨創的卓見である。又彼は素朴ながらも一種の經濟史觀をとつてゐる。(神功皇后の三韓征伐に關して)之れやはり彼が紀州藩の勘定奉行頭としての生活の影響と見得よう。尙彼は本居内遠に師事して古代にも憧憬してゐるが同時に徳川の世をも禮讃する。此に吾々は徳川時代がもてる矛盾を彼にも見出し得るのである。

武士的性恪の缺陷

西堀 一三氏

武士といふものは始めその興起した時代と後に政權を執る様になつてからとは餘程その傾向が變つて來た、王朝の貴族は靜的であつたが武士は動的で意志の強力性といふものを持つてゐた。武士階級は政權を實行するに當つて、貴族の眞似をする様になつて來た。自己本來所有のものを確認せず、他の方面に向つたのである。その一例として茶碗の歪みの強いものを見うる。それは非均衡的な形——日本様式であるが——である。近世に入つてその武士的性恪の缺陷を補ふ爲に、武將が文人を使用した事でも知られる。

日本様式に就いて

山根徳太郎氏

各民族はそれ／＼一つの類型、又は一つの様式を有つと考へられる。日本民族に就いてもその歴史の各時代に通じた日本様式といふべきものがなければならぬ。之は把握に困難であるが、今日「日本的なるもの」の論議に於いて求めて割合に得られたのである。その一つの特性は不均衡性であつて、之は茶室の構造、俳句和歌の字數順序、或は茶碗の歪等がその一例として見られるのである。之は日本人の農耕生活から來たのだと思ふ。夫は動的の生活である。自然の印象と云ふものは不均衡である。西洋派の均衡は不自然なものである。このことは日本文化が未だ新しい文化なるが故でもある。

松花堂昭乘の交友に就いて

井川 定慶氏

松花堂昭乘は男山八幡に居を構へた茶匠であり、寛永十六年九月十六日、五十六歳を以てなくなつた。今年はその三百回忌に當る。彼は從來秀次の落胤と傳へられてゐるが、八幡の西村氏の藏する彼の兄に當る中沼左京の系圖や、本學保管の近衛家文書によれば、彼と左京は幼少の頃より近衛家に養はれたと考へられ、彼の交友關係も從つて近衛家を通してのものと思はるべきであらう。信尋・通村・羅山・山樂・遠州・光悅等彼には知名の交友が多いが、彼が眞言の寺にありながら禪的趣味に深く通じたのは澤庵・江月等の存在によるものであり、その感化を見逃すことは出來ぬと思ふ。

中世の兵學に就いて

徳重 淺吉氏

兵學は主として僧侶の手により傳へられた。之は元來兵法は密



教及びその世俗的形態たる修驗道と離れ得ぬ關係にあつたからであつた。室町時代に入り、故實家たる小笠原・今川・伊勢氏が幕府に於て勢力を得るに及び秘法と武家故實が結びつき禮式を中心とした兵法が形成された。之が中世の兵學であり天正の頃まで續くが銃砲の傳來と佛教文化否定の氣運により北條流の兵法が現はれるに及び一變して近世の兵法となる。

伴大納言繪卷に就いて

割地問題の一歸結

以上二編次號掲載の豫定につき梗概を略す。

### 東洋史談話會

例會 十一月十二日(土曜)午後一時半より樂友會館に於て開催。參會者十四人。

明の帝室に於ける喇嘛教徒の問題 三回生 佐藤 長君  
第三回大會 十一月二十一日(月曜)午後一時より樂友會館に於て開催。那波教授の開會の辭につきき

一、王玄策時代の印度情勢

一、晋の南渡と招魂葬議

一、唐宋時代に於ける福建省の開發に就いて

一、桃源瑞仙の史記抄を読む

一、明代田賦銀令の一面

一、章學誠の史論

一、漢晋に於ける時代の展開

源 豐宗氏  
牧野信之助氏

一、北魏藝術の盛衰

一、史觀と史體

一、高句麗の陵制について

一、尼格尼敦考

右十一氏の研究發表あり、最後に羽田先生立つて閉會の辭を述べられたのは六時過、暮れやすい晩秋の夕陽がたちこめた頃であつた。つゞいて階下食堂に於て晚餐會を開く。參會者二十八名、會食後、東京より來會の江上波夫、慶松光雄兩氏、神宮學館教授丹羽正義氏、本學工學部村田治郎教授、羽田・那波・宮崎三先生の談話あり、八時半解散した。

### 東洋史研究會

十二月三日(金曜)午後六時より樂友會館に於て内藤湖南博士「支那繪畫史」の出版を機とし、本書を中心として支那繪畫を語る小會を催した。相會するもの十七名、東方文化研究所より同所美術研究室の所藏にして本書挿圖のもととなりし數多の寫眞、及參考書類を回覽に供した。なほ次回は唐五代の繪畫を語る夕を催すことになつてゐる。

### 支那學會大會

十一月二十七日(日曜)午後一時より樂友會館に於て開催、講演者及演題左の如し。

支那學徒の現在に於ける課題

平岡 武夫氏

水野 清一氏

丹羽 正義氏

梅原 末治氏

石濱純太郎氏

末世風俗

致知在格物鄭注管見

右終了後、同館食堂に於て晚餐會を開いた。

宮崎 市定氏  
鈴木 虎雄氏

大同龔都時代の北魏佛教

雲崗石窟に就いて

十二月十日(土)午後一時半

囑託員 塚本 善隆氏  
囑託員 水野 清一氏

十二律管考

六朝時代美術に於ける形式の問題

研究員 藤内 清氏  
研究員 長廣 敏雄氏

東方文化研究所學術公開講演

東方文化研究所に於ては、昭和十三年下半年事業として左記學術公開講演を開催せし所、毎回百名内外の聴講者があつて成功を収めた。殊に十一月十二日創立記念講演會には、小川茂樹氏によつて多數甲骨文關係資料が展觀されて同好者の心を惹き、又十二月二十六日の講演の際には、今年春夏の交、研究所員水野清一氏等が現地に於て苦心の結果實測・撮影・拓出せし數々の資料を、講堂・研究室の周壁に、水野氏の説く雲崗様式の一面をおもはせるが如く、所せきまでにならべ掲げて參會者を喜ばしめた。

十月八日(土)午後一時半

世説新語の時代

世説新語の文章

十月二十九日(土)午後一時半

歲星紀年法に就いて

佛典に施されたる四聲點に就いて

十一月十二日(土)午後二時(第十回創立記念)

甲骨文の基礎的研究

禮經と漢制

十一月二十六日(土)午後一時半

研究員 宇都宮清吉氏  
研究員 吉川幸次郎氏

研究員 能田 忠亮氏

囑託員 倉石武四郎氏

研究員 小川 茂樹氏

商議員 狩野 直喜氏

西洋史讀書會

例會 昭和十三年度第三回例會は十月二十九日午後六時より樂友會館にて開催、左記二君の讀書紹介並びに研究發表ありて九時頃散會。出席者は、時野谷・原教授、鈴木講師をはじめ二十一名。

Ernst Lohmeyer: Soziale Fragen im Urchristentum

二回生 江藤 悦三氏

George Pagis: La venalie des offices dans l'ancien

二回生 山口 牧氏

大會 第六回西洋史讀書會大會は特に東北帝大から平塚博士の御來會を得て、例年になき充實振りを發揮した。

時野谷、原先生の開會の辭に始り御講演を御願ひした各氏は日頃御研鑽の一端を時餘に互つて發表せられた。左にその一部をしるす事とする。

世代・年代・時代

野末 良平氏

世代・年代・時代は、之を歴史的時間の構造的範疇として考へるならば、常に、何處でも、相互媒介の容で見出す事が出来るであらう。併し、世代・年代・時代は、實に、構造的範疇たるに止

らないで、同時に、歴史的世界の發生的圖式を意味する。ロレンツは、世代を「人間的自然に内在する原理」であると云つてゐる。世代と雖も、尙、年代の契機を含み、時代の意義を持つ。だが、世代がどのやうに複雑な構成を有つ場合でも、而も尙、之無くしてはその概念構成を失ふ根源の規定である。年代が一義的である世界と雖も、矢張り、世代と時代の媒介を全く断たれたならば實際には既に成りたたないのであるが、併し、尠くとも、理論的にはこの二つの契機を去つても未だそれを思惟する事は出来るが、年代の契機を喪つたならば最早や思惟する事も不可能な、つまり年代が決定的な意味を有つ世界である。ニルソンが Praktisches Leben と呼ぶ世界が、之である。時代は、世代を基礎とし年代を規範とする歴史的世界の概念である、而も、發展によつて完結的な全體概念である。時代によつて歴史的世界はその眞實を顯示する。その意味では、世代も年代も歴史的世界成立の地盤に過ぎない。

アングロ・サクソン時代のマナーについて 藤井 寛介氏

一、アングロ・サクソンの社會經濟史研究の概観 二、シーボムのマナー起原説 三、シーボム説に對する批判 四、ザイノグランドの見解 五、アングロ・サクソン時代の農業制度 A、開放農地制度 B、疎放的耕作法集約的耕作法 C、集約的耕作法は如何にして疎放的耕作法に代つたか D、混淆地制 協同耕作開放農地制度は血縁關係の崩壊と農耕漸次重ぜられるに従つて起れる經濟上の協同土地耕作から發生せるもの 六、結語 A、ア

ングロ・サクソン時代の主たる様相、特質は社會關係、政治關係の變革、土地方面即ちマナーの經營はむしろ第二次的、何故ならばマナーの經營は開放農地制度の習慣の延長 B、アングロ・サクソン時代のマナーに就て特に注意すべき點、(イ)此の時代のマナーは未だ名稱のみで完成されたマナーと云ふよりはむしろ成立の中途に存した、(ロ)領主の個人的勢力の萌芽は最初より存在せるも一般農民よりの武士階級の區別、有力者の勃興、教會勢力の確立、土地税の重壓等の現象を伴ひ、マナーの領主はタウンシップの上に特權を獲得しつゝ、あつた。

古代埃及第五王朝に就て

岡島誠太郎氏

埃及王の稱呼が五通りあるが、金のホルス名は第四王朝の興隆と共に生じたがラーの子としての名は第五王朝に起ると云はれる所以をとき、これはラーの信仰を盛んにして、デルタ地方の經營に當る點に於て意義があるが、同時に王が神の子たる表示を以て強き神より善い神たるを現はし、王權の絕對性に搖ぎを見ることとなる。しかもこの王朝の最終の王ウナス(Uhnes)に至りて、ピラミッド・テキストが始まり、第六王朝の四王の陵にも行はれるが、これが第四王朝の勢威最も強大なる陵墓に現れなかつたのは、第四王朝に於ては、この必要を見ず、第五王朝になりて、王權次第に衰へ、衰微の極テキストを以て王者の稜威を幸じて繋がんとしたるものと解すべきである、従ひてこれは寧ろ王者にとりては不名譽なるを以て結ぶ。

中世伊太利人のイタリヤ觀

帝大講師 平塚 博氏

ダンテのイタリヤ統一觀は如何なる物であつたらうか。都市國家、大小諸侯の並存する當時のイタリヤに於て、ダンテは、かゝるイタリヤの現状を如何に見たであらうか。氏は俗語論を通じて次の様な見解を示された。

ダンテは、地域的、人種的多様性を止揚して、そこに流れる共通の性格を捉へ、以て至イタリヤ人の間に文化的統一の可能性を考へてゐた。

「少くともイタリヤには十四の俗語があり、夫々が又、多數に分離錯雜してゐる。」イタリヤは言語に於て既に無限な多様性を示すのみならず、政治に於ても亦、小都市國家の對立分裂の混亂を繰返してゐる。かゝるイタリヤの現状に潛む禍根の一端をダンテは懸望した。それは彼にとつて *Sollan* としての統一あるイタリヤへの願望に他ならない。

言語の統一を求めたダンテはイタリヤの國家的統一をも要求した。然らばダンテの統一國家としてのイタリヤは如何なる國家であつたか。それは中世的秩序に於ける統一であるか、或は全く近世的な國民國家としてあつたか。

尙ほ講演會終了後、席を移して晚餐會、懇話會を開く。時野谷原教授を始め、東北帝大から平塚博氏、祇園寺信彦氏、更に本大會の爲御集り下さつた三喜田熊藏氏、岡本正藏氏、薄井實介氏等十五名概を盡して午後九時散會、こゝに本年度大會を意義深く終つた。

### 地理教室秋期旅行記

恒例の二回生の研究旅行は十月十日より五日間室賀先生御指導の下に能登半島方面に行はれた。全コース雨で充分なる成果を得られなかつたのは残念。

十日青森行急行にて京都出發、小牧先生御見送下さる。車窓より加賀平野、金澤附近の花畑、雨に煙る河北潟をながめつゝ、和倉に着く。

十一日早朝和倉發。本江附近にて *Andesite* による景觀の全然他と相違した地帯を通る。輪島にて丸三商會見學、輪島塗に就きて見聞す。バスにて門前町へ、町及丁度開かれて居た市を見學、午後九時和倉に歸る。

十二日早朝和倉發、七尾セメント、七尾高女、七尾港歴訪、石崎村にて *Siliceous organic rocks* の一種 *Isolite* 採集、此の附近に多量にあり、耐火材として盛んに利用す。和倉歸着。

十三日和倉發穴水經由豪雨の中を飯田に至る。同車せしものに北海道より歸る者多し。飯田高女小野教頭より御厚遇を受く。若山川谷の南部中田附近の *Gypsum* の鑛山見學、此處の *Gypsum* は *Tertiary* の *Clay, Shale* の中に塊狀をなす。Fossil 二個採集、嶺山教授の鑑定によると *Lucina acutilineata* 及 *Thyasira bisecta* なり。夜九時和倉に歸る。

十四日連日の雨晴れず、然も當分晴れる見込なしとの事に當來地方を割愛して午前十一時九分和倉發午後七時近く京都に歸る。

總行程僅かに一千軒。(川上記)

### 地理學談話會

例會 十月八日 午後二時 於實習室

一、内地の鹽業

三回生 内藤 玄匡氏

一、渡歐談

小牧 實繁氏

小牧教授は將來の各國製地圖・會議報告書など持參展觀に供された。出席者二十七名。

例會 十一月五日 午後二時 於第二教室

一、蒙疆旅行談

三回生 淺井 辰郎氏

一、江南旅行談

瀧本 貞一氏

淺井君は今夏參加せる京大學術調査隊の旅行經過を十六ミリ映畫幻燈使用を以て報告、出席者十七名。

大會 十一月二十日午前九—十二時 於樂友會館

一、閉會之辭

淺井 得一氏

一、關東地方諸都市の人口増加について

淺井 得一氏

一、越前五箇の製紙

小葉田 亮氏

一、市町村名に就て

近藤 忠氏

一、神崎川と尼崎

渡邊 久雄氏

一、地方行政區劃の政治地理的研究

米倉 二郎氏

一、都市の位置と港灣

瀧本 貞一氏

一、滿洲國の東部國境に就て

増田 忠雄氏

一、東夷と南蠻

藤田 元春氏

一、植民地理學方法論の一節

田中 秀作氏

一、閉會之辭

小牧 實繁氏

正午閉會と共に記念撮影を會館裏庭にてなし、七十錢の會費にて同館食堂にて午餐會を開く、午餐會出席者三十七名。

### 高麗寺址の調査

京都府相樂郡上狛村大字上狛に在る高麗寺址は早く大正八年梅原助教によつて調査され、二箇の土壇、その或者に造出しある礎石の存すること、それから白鳳時代の古瓦の出土することが學界に報告された。その後、同地の中津川保一氏は熱心に同寺の古瓦を採集されてみたが、たまく昭和十年春、村道改修のため寺址南方土壇(後に金堂土壇と判明)の西端の土を採取した所、鐵釘等と共に金銅透金具片を發見して興味をつよめた筆者は恰もその際中津氏を訪ねてまた所藏瓦中に飛鳥式の素燐瓦のあることも見出し、前者と併せて之を學界に紹介したのであつた。其の後本年に至つて田中重久氏は中津氏、木村捷三郎氏と協力して南方土壇の東部に心礎を發見され、同寺の伽藍配置が所謂法起寺式なることを實證、其の結果を考古學誌上に發表した。

こゝに於いて京都府史蹟勝地調査會は同遺蹟再調査の必要を認め、昭和十三年五月以來同村役場の援助のもとに實地調査に着手し、十月下旬に至つて約一週間に亘り、徹底的な調査を行つて輝かしい實績をあげることが出來た。調査は同會委員たる梅原助教が主として擔當、西田教授の來接もあり、また京都帝國大學考

古學教室員等が調査の責務に當つた。

今次の調査の結果に據ると先づ南方土壇には二つの瓦積みの基壇あることが判明した。東方の基壇は一邊四十一尺四寸の正方形で、中央には圓形凹式柱座ある心礎があり、塔址と礎定された。

そして心礎の横正面には舍利を納めた穴が見出され、種々の議題を提供した。塔址土壇上には心礎の外に礎石は見當たらなかつた。次に塔正面には石階が存し、その附近で完全な十葉素齋の鏡瓦が見出された。塔址土壇の瓦積みは金堂址と異なり、上端は重弧文の宇瓦を一列に並べて裝飾してある。附近には塚が散亂してゐたが、この塚は瓦積みの宇瓦の上を被うたものと推定された。

更に注目すべきはこの瓦積みの内側に長方形の石を以てした石積みが見出されたことである。これは土壓を防ぐ爲といふよりも、瓦積みによる改修以前の基壇であると見られた。塔及び金堂址土壇の裾には幅約五尺の、河原石を以て葺いた石敷が廻つてゐる。

金堂址土壇は塔の其れより二十八尺を距て、短邊四十三尺の長方形を呈するが、長邊は土壇の西方が切廢されたために不明である。こゝにも正面の、ほぼ中央と推定される位置に石階らしい石積みが見出された。かやうに今次の調査はひとり高麗寺址の闡明に徹底的な結果を齎したばかりでなく、實に當代寺院史の研究上に企劃的な成績を將來したものと謂はねばならない。吾人は心から其の詳細な報告の刊行の一日も早からんことを冀ふものである。

〔角田〕

### 大津京址の調査

滋賀縣に於いては去る昭和十三年五月勅旨を以て天智天皇を奉祀すべき神宮御創建の事の仰出されたに就いて、天皇の故宮址の今猶確乎と判明しないのを遺憾とし、同縣史蹟調査員柴田實氏をしてこれが再調査に當らしめることにした。蓋し、この宮址に就いては去る昭和三四年の交、現東京文理科大学助教肥後和男氏が同じく縣の依頼を受けて始めて組織的な發掘調査を行ひ、まづ天智天皇の御願にもとづく崇福寺に關して彌勒堂、小金堂、塔等の遺址を明らかにし、更にその東南方に當る南滋賀に於いて一寺址を發掘して之を梵釋寺に比定し、梵釋寺は即故宮の址に當られたものなりとする理由から、この遺蹟を同時に宮址とも推定されたのであつたが、この推定に就いては主として出土の遺物の年代觀よりして異説を生じ、未だ學界の全幅的承認を得るに至らなかつたのであつた。従つて今次の調査に當つては氏が種々の障礙よりして十分に發掘調査を遂げることの出来なかつた箇所を主とし、なほ氏によつて發掘せられた部位に就いても今一度精査して遺物の採取發見に努めることとし、まづ去る八月南滋賀字勸學堂東方竹藪の開墾から始められた。この地は主要建造物の中心線より遙に東方に當る關係上、遺蹟としては、廻廊の礎石かと思はれるものを從來知られてゐるもの、外更に二個を發見せると、その外方に長さ七十尺に餘る石垣を掘出したのみであつたが、出土の遺物としては典型的白鳳期様の複瓣蓮華文とこの遺蹟に特有な

る巨大なる箱瓦を夥しく發見して、この遺跡が單純なる一寺阡と考へ難いことを思はしめると共に、その葺方等に就いて新しく推測を加へる根據が得られた。

この發掘について塔阡の調査が企てられる豫定であつたところ、諸種の事情よりして未だ着手せられない中、偶々同九月下旬滋賀里なる崇福寺小金堂阡附近に於いて従前同地に於いては未だ發見せられたことのない奈良朝様式の複疊蓮華文瓦が發見せられたのを端緒に、なほ之を探索する中、圖らずも天平期或はそれ以前とも考へられる埴佛の破片を拾得し、いよ／＼そのまゝ放置し難いやうに思はれた爲十月下旬、小金堂阡北斜面一帯を精査して更に多數の埴佛と遺瓦を發見し、堂阡に於ては前回の發掘に際しては知られなかつた見事なる基壇石組を發見した。これらの發見によつて從來この遺蹟が文獻上よりしては崇福寺阡たることの十分推定せらるゝにか、はらず、遺物としては平安朝以前に遡るべきもの、一つも發見せられなかつたことよりする疑惑が晴れたばかりでなく、その埴佛の如きは山田寺その他の遺址發見のものと同じで奈良時代佛敎文化を考へる上に一新資料を加へたものといふことが出来る。尙同調査は十二月より正月へかけて引きつゞき行はれる筈である。(柴田)

## 考古學談話會

考古學談話會第二學期例會は昭和十三年十月二十九日午後一時半より文學部陳列館第二教室に於いて開催された。出席者は梅原

助教、肥後東京文理大助教、水野講師、田村講師、柴田講師等三十五名、頗る活況を呈した。

### 挨拶

大和橿原神宮敷地の發掘概報

藤岡謙二郎氏  
末永 雅雄氏

雲崗石窟の調査

水野 清一氏

高麗寺の發掘報告並に傳崇福寺阡發掘品の所見

梅原 末治氏  
釣田 正哉氏

内蒙古旅行談

中村 清見氏

前方後圓墳の一考察

初め藤岡幹事登壇し、本會の創始者であり、大正十四年創立以來絶えず誘掖指導を惜まれなかつた濱田耕作博士の薨去に就いて會として哀悼の意を表した。末永氏は最近建國奉仕隊によつて發掘されてゐる大和橿原神宮外苑敷地で見出された遺跡の概要を述べ、出土の繩文土器、土偶、裝飾具等に見らるゝ學の興味を説明された。ついで水野講師は十六耗を映寫しつゝ、今春調査に従事された大同雲崗石窟に就いて話を進められた。梅原助教は十月中旬に調査を完了した山城相樂部高麗寺阡の全貌を説明され(別項参照)また近江の崇福寺に關して豫々抱いてゐた疑問が最近出土の埴佛等が解決に新しい資料を提供するに至つた事を同寺の研究史に關聯して述べられた。次に今夏京都大學學術研究團に加はつて内蒙を旅行した釣田氏の旅行談あり、採集に係かる土器や細石器を展覽した。なほ中村清見氏の講演は前方後圓墳成立の過程に關する一考察であつた。本回は演題が多方面に亘り、從つて出席者も多く、盛況の裡に午後五時閉會した。(角田)

會報

つた。

一、新會則第五條後段に依る新評議員推薦の件

二、學生會員の會費に關する件

三、會員募集の件

右のうち第一項に就いては多年會務に盡瘁せられて來た理學博士小川琢治・文學博士矢野仁一・同新村出・同石橋五郎・同羽田亨の五氏を推薦の件一致を以て議決した。

◇會員動靜

◇入會

兵庫縣豐岡町豐岡高等女學校

貴田 美子氏

(錦織 透氏紹介)

福岡縣福岡市紺屋町二一

中江 健三氏

(重松俊章氏紹介)

京都市松原通鉄屋町

高崎 光哲氏

(稻葉慶信氏紹介)

大阪市北區源藏町三

濟本義之助氏

(江崎政忠氏紹介)

廣島市富士見町八九

小島小五郎氏

兵庫縣川邊郡川西局區内 花屋敷精常園

春日 保氏

(右二氏 梅原末治氏紹介)

京都市下京區八條内田町九

岡本 午一氏

京都市左京區北白川上池田町三八

内藤 乾吉氏

一、臨時評議員會 十一月十六日(水)午後四時より京都帝國大學

文學部陳列館東洋史教官室にて開催。羽田・西田・時野谷・原

那波・小牧・梅原の諸評議員參集。庶務會計擔任から過去一ヶ

年間の會務の報告があり、また會の發展に伴ふ一部會則變更に

就いて協議を遂げた。

一、本年度大會 十一月二十日(土)同二十一日(日)の兩日に互つ

て開催。盛會であつた。(別項参照)

一、會則一部變更 前臨時評議員會に於いて得た一部會則變更の

原案を十一月二十日開催の大會に於いて議題に上した所會員一

同異議なく可決されたので其の變更を見ることになつた。右新

會則は次の如くである。

第五條 一、評議員は京都帝國大學文學部史學科教官及評議員

會に於て推薦したる者を以て之に充つ

一、委員及書記は評議員會に於いて之を囑託す

第六條 委員及書記の任期は二ヶ年とす、但し再任することを

得

一、新評議員 十二月十九日(月)午後一時より文學部陳列館會議

室にて新會則に基く評議員會を開く。那波・小牧・中村・梅原

宮崎・藤の六評議員參集。左の諸事項に就いて協議する所があ



京都市左京區北白川小倉町 東方文化研究所

京都市左京區下鴨泉川町六

(右五氏 外山軍治氏紹介)

京都市左京區淨土寺眞如町三九等井方

京都市左京區松ヶ崎河原田町七

◇名簿訂正

京都市左京區松ヶ崎河原田町七

◇寄贈交換圖書目錄 (十二月現在)

渡邊幾治郎著 日本近世外交史

◇寄贈交換圖書目錄 (十二月現在)

木代修一編 井上省三傳

佐伯啓造編 綜合古瓦研究

吉田澄夫著 天草版金句集の研究

小倉進平著 朝鮮語に於ける謙讓法・尊敬法の助動詞

史學雜誌 四九ノ一〇・一一・一二

歷史地理 七二ノ四・五・六

社會經濟史學 八ノ七・八

人類學雜誌 五三ノ一〇

考古學雜誌 二八ノ一〇・一一

三國谷 宏氏

日比野文夫氏

荒木 敏一氏

井上 頼壽氏

横田 健一氏

澄田 正一氏

著者

井上省三記念事業委員會

鶴 故郷 舍

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

東 洋 文 庫

文 化 五ノ一〇・一一

國學院雜誌 四四ノ一〇・一一・一二

史 淵 一九

史迹と美術 九ノ一〇・一一・一二

經濟論叢 四七ノ四・五・六

社會學徒 一二ノ一〇・一一・一二

史 學 一七ノ二

臺大文學 三ノ四

國民精神文化 四ノ三

史 觀 一七

民族學研究 四ノ三

皇 學 六ノ二

東洋史研究 三ノ六、四ノ一

中國文學月報 四三

善隣協會調查月報 七七・七八

歷史學研究 八ノ一〇・一一

商業と經濟 一四ノ一

軍事史研究 三ノ五六

哲學研究 二ノ三ノ九・一〇・一一

紀州文化研究 二ノ九

宗 學 研究 一六

イスラーム 五

典籍趣味 八

無 關 之 二

宗教と藝術 一八ノ二・三

東北大文科會

國學院大學

九州史學會

史迹美術同致會

經濟學會

社會學徒社

三田史學會

臺大文學會

國民精神文化研究所

早大文學會

日本民族學會

神宮皇學館々友會

東洋史研究會

中國文學研究會

善隣協會

歷史學研究會

長崎高商研究會

軍事史學會

京都哲學會

紀州文化研究會

谷大宗學研究會

イスラーム文化協會

典籍研究會

むかしの會

龍大文藝部

ペリオ